

精神文明と奇跡 1982年 日新社

政木 和三 (まさき かずみ)

大阪帝国大学航空学科の研究室に入る。

通信工学科、精密工学科を経て、工学部工作センター長。

現在、林原生物化学研究所参与。工学博士。太平洋戦争中は新兵器の研究のため戦時研究員となる。インスピレーションにより、800件余の発明をなす。

地磁気は消滅し逆転する

地球は1つの大きな磁石を内蔵しているが、いま、その地球の磁気がどんどん弱まっている。

地磁気の存在を発見したのは、今を去るわずか400年前に、エリザベス1世の典医、ギルバートであった。

しかし、地磁気の変化の模様は、古い地層の水成岩中の磁気鉱物によって記録されており、過去数10万年の変遷が解明されてきた。イギリスのブラケット教授の磁力計を用いて南北アメリカ大陸、インド、アフリカ、ヨーロッパの大規模な採集を測定がなされ、ウェーベナーの大陸移動説を立証することになった。

日本においては、1971年の秋、京大理学部の堀江正治氏によって、琵琶湖の堆積物を湖上からのボーリングがなされ、200mのボーリング・コアを切り取ることに成功し、種々の測定に利用された。その資料は、名大、金沢大、東大、大阪電通大、および阪大の川井直人氏等によって解析が行われて大きな成果をあげた。

特に地磁気に関しては、今を去る35万年前、29万年前、18万年前、そして最後に11万年前に衰弱劣化し、磁針がふらついがことがわかった。そして5千年から1万年後に現在の状態となったことも判明した。

11万年前の地磁気の異常は、琵琶湖からだけではなく、アメリカのラモンド海洋研究所の大西洋のボーリング・コアからも確かめられている。

地磁気変動の周期は8万年から12万年ぐらいであるが、その周期と氷河期および火山活動にも影響があるようである。

地磁力数値は、この2000年間減少をつづけており、特に最近の100年間には5%以上も減少し、2000年前の最大値の半分以下になっている。

続々発見された磁場の病気——11万年前の地球磁場の病気は、琵琶湖からだけでなく、アメリカのラモンド海洋研究所の大西洋のボーリング・コアからもたしかめられておりブレイクイベント(Blake Event)とよばれていた。イベントとは、日本語の事件という言葉に対応する。

18万年前、29万年前および35万年前のものは琵琶湖からはじめて発見された地球磁場の衰弱事件で、それぞれBIWA I' BIWA II 及び BIWA III と呼ばれている。最近、ソ連でもこの3事件に対応する記録が発見されたという。

地球径の約4倍にあたる外空間に、この磁力線は拡がっていて、地球と一緒に自転をしている。その体積は地球の50倍を遥かに越す大空間プラズマ圏である。この外側には太陽から飛んで来る水素の原子核や電子が押しよせ、この場所で磁場と押し合って平衡をたもっている。このプラズマは、厚くひろがって地球直径の8倍にも及ぶのである。

いわゆるバン・アレン帯は、プラズマ圏の外側あたりに位置し、水素原子核と電子のみならず、星間物質で、荷電した宇宙塵が両磁極のあいだにはられた磁力線をつなわたりして数秒で往復する。アメリカの打ち上げた探測器パイオニア4号が、1959年にはじめて発見した時は、まだ正確なデータがなく、そのひろがりが正確にはつかめなかつた。

この情報は極めて新しく、筆者たち大阪大学の研究グループが、東大洋研と協力して獲得したもの。太平洋マリアナ海から採集した海底堆積物に磁気の死が記録されているのである。

「松山期」とは?——日本にとどけられたこれらのボーリング・コアは、約4mmの厚さの薄板状片に、下から上へと600枚にナイロンの線で上手にスライスされ、おののが敏感な磁力計で測定された。

ルリ色に澄み切った熱帯——マリアナ海はにごりが少なく、海底に沈殿するものは、ほとんどが有孔虫の死骸で、わずかの鉱物と粘土粒子、他には眼にみえぬ 1μ 以下の宇宙塵や磁気鉱物からなり、沈殿は大変緩慢に行われ、約600年かかるべく約4mmの厚さになる。海底には1年に 50μ の泥がたまるだけというわけで、その速度は“空き家”に塵がたまるよりはもっと遅い。

磁気を帯びた粒子は、当時の磁場に平行に並び、上へ上へと落ちてくる粒子と有孔虫で身動きできなくなると、泥中に固着し、地球磁場の化石になる。

したがって、各薄片は600年を1齣とする磁気録音板で、全片を順序よく上下に整理すると、地球の過去からの声を聞くことができるうことになる。磁場の遺言はもちろん、新磁場のうぶ声が聞ける上に、約1万年間の、無磁場の世界でのかすかなささやきも聞き取れ、現在解読されつつある。

そして現在の地軸と地磁極との傾きは、約11度であるが、これが更に傾くようになれば磁場は急激に弱まり、ついには消滅してしまうことになりかねない。

地球の磁気が消滅したときは、磁針による方角がわからなくなり、渡り鳥の方向も不安定となるが、そんなことは些細なことであって、人類、否、地球上の全生物に対して最も重大なことが起こるものと思われる。磁場が弱くなり、逆転するころに、地球の上空には大きな変化が起きてくる。

現在の地球の上空には、地磁気の磁力線によって造られた磁気圏、バン・アレン帯等によるベールによって、太陽からの有害な放射線を遮断し、地球上の生物を守っているが、地磁気が消滅すると、このベールが全部はぎとられることになり、地上には殺人光線以上の荷電物質、紫外線が入射し、全植物は全滅することになる。

そのとき、人間および他の動物はどのようなことになるだろうか。

地磁気の減少がこのまま続けば、あと200年ぐらいで地磁気は消滅し、地球は逆転するかも知れない。

今後は地磁気の方向変化を精密に測定し、その原因を解明し、総力を結集して地磁気の逆転を防止せねばならない。

その原因は何であろうか。地球内部のマグマの影響とも考えられるが、人間の精神的な力が関与しているとも考えられる。

その根拠として、永久磁石を用いた政木フーチパターンによって人間性が測定できるが、自由に動くように吊り下げられた磁石に、精神統一して手を近づけると、微弱ではあるが、反発されると言う事実から、人間の生命力または精神力と磁力との間に、何か関連があるようと思われる。もしもそれが事実とすれば、世界中何10億の人間の精神力のエネルギーの総和は大きく、地磁気に影響を与える可能性も生じてくる。

最近の100年間に科学文明は非常に進み、人間の生活は大きな恩恵をこうむっている。生活が楽になれば人間はさらにその上を望むために、かえって欲求不満者が多くなっている。現在の科学文明と精神文明が並行して発展していれば、このようなことは起きなかつたであろうが、物質文明はそのまま容易に生活に取り入れられるために、人間は安易な生活に走りすぎて、精神文明を忘れてしまつたものである。

しかしその結果は、地下資源の大量消費による空気の汚染、洗剤等による水質汚染、それに伴う生活環境の汚染等によって、人間の生活を苦しめるようになってきた。その上、人は暇ができると良からぬことを思うようになる。その暇が欲求不満となりひいてはストレスともなつてゆく。

全世界の人口数10億のストレスをエネルギーに換算すれば、膨大な量となることだろう。

最近の研究によれば、渡り鳥は前頭にある磁気を感じる部分によって、何100km、何1000kmを間違わずに飛ぶことができるものらしく、また磁気を持ったバクテリヤの発見もなされたと聞く。人間も磁気を発し、磁気の受信も可能ではないかと思われる節もあり、超能力現象も、磁気の探査から始めると何か得られるのかも知れない。

現在は磁気の成分はわかっていない。波動性か、粒子性か、そして伝播速度等も不明であるが、私達の身近に実在している。

もしも人間のストレスによって、地磁気と逆の方向の磁気が発生するとすれば、何10億の人間の反地磁力は膨大なものとなり、地磁気を消滅する方向に働く可能性もでてくる。

周辺はみな敵か

現在の社会においては、労使は仇敵のように思い込み闘争を続け、同職種の人々および同業者を互いに商売敵といい、親友も出世の妨げとして敵視する。このように自分の周辺はすべてが敵であろうか？

動物界は弱肉強食の力の世界であろうが、人間界は少しは違うはずである。

自分が相手を敵だと思えば、その反作用によって相手も敵だと感ずるように、作用と反作用は物理現象だけではなく、心理現象にも同じように作用することを忘れてはならない。虫の好かない人と思えば、相手もそれと同じ気持ちになることは当然の理

であり、自分に対しくどくどく文句を言っている人に対して反感を持っておれば、その小言はますます勢いを増してくるが、この人の言っていることは、自分に参考になることも含んでいるから長時間を割いて自分のために意見をしてくれる、有り難いことだと思って感謝の気持ちを示し、それを聞いていると、だんだんと柔らかくなり、最後にはよろしくと言って握手して別れてゆくようになるだろう。

その時、よくわかりました、有り難うと、心からお礼を一言述べるだけで、相手の敵愾心も消えてしまうことだろう。相手を好きにならなくてもよい。どんな相手でも嫌いになってはいけない。

好きになろうとすれば心がなごみ、解決の方途も生まれてくるが、嫌いだ、憎い人だと思い続けていては、一生、問題の解決はできないことになる。自分の立ち場から見ると、正当であっても、別の立ち場から考えれば間違っている場合もある。

動物の世界においては、自分が生きるための糧として他の弱い動物を殺さねばならない。そして次の瞬間には、自分自身がその境遇におかれることになり、いつも戦々恐々としていることになる。

人間の生命体が地球に到来した時には、未だ人間の住める状態ではなかったために、獣類または草木に宿って修行を行ったといわれているが、その獣的な生活が1億年以上も続いたために、その魂までもけものになり切った人々も相當にいる。

しかし、本来の人間はすべて神に近い性格、否、神と同じ性格を持つ善なるものであったはずである。畜類に宿った時代の古い記憶を捨て去り、私は万物の靈長たる人間であると自覚したとき、動物的な感情や行動はできないはずである。

動物的な行動とは、自分さえよければよいという気持ちのために、他人がどんなに迷惑を被ろうと困ろうと構いなしに自分の利益のために進んでゆく人であるが、このような一生を送って本人は満足であろうが、輪廻転生によって、数100年後に生まれ変わってきたときに、他の人に苦しめられ、一生、苦の生活を強いられることになる。

人間は生まれくる直前まで、今度こそは善行を積み修行しようと思って生まれ出ても、もの思うころには生まれる前の自己の覚悟を忘れ、目先の欲望に迷わされ、凡俗の一生を終わる。

政木フーチパターンによると、胎児から小学生までは、ほとんど全部の人が理想的な男性像であり、また、理想的な女性像である。

それが10歳を過ぎ欲望が芽生えたころに、自分の肉体に入ってくる第2生命体によって、欲望の先走る人間性となって、生まれ出る前の覚悟は完全に忘れてしまうことになる。

攻撃性の人間

地球にはいま重大なる危機が迫っているが、今から3億6千万年の昔にも、人間が住んでいたある星も同じような状態にあった。時の科学の総力を結集し、宇宙航空機として作られた空飛ぶ円盤に乗って、人類の祖先は地球に飛来したものとされている。

しかし、当時の地球は未だ人類が生活できる状態でなかったため、肉体は滅び、生

命体だけが残ることになった。

当時の人類は、すべて神のような性格を持った理想的な人間像であった。

しかし肉体がすべて滅亡しては、その修行の場がないために、草木または畜類の長い間を耐えながら、ひたすら肉体に宿って苦労しつつ生命体の向上を図った。植物にはシダ類に宿ったものもいたが、動物としては、巨大なる恐龍等にも宿って、3億年も人間の発生を待ったものである。

そして猿が発生したころから、人間の生命体は人間への進化を意識的に動物の体内にありながら願っていたのだ。その信念による願いによって、猿人類から突然変異の進化が起り、人間の肉体の発生となった。

それはいまから数百万年前のことである。そして原始人としての生活が始まったが、当時は食のみに全精力を注入する必要があるために、食糧を得るための共同生活が始まり、その社会は平和であった。

その集団が多くなるにしたがって、動物的精神を持った人間が力によって暴力を振るうようになってきた。

地球に飛来した人間は全て神の性格を持っていたが、3億年間も動物の体内に宿った生命体は、その動物の本能に近い人間性となった者も多く、その割合は半数以上にも達したと思われる。それらの8割の動物的精神を持った人間は、攻撃的な人間となり闘争を好み、戦争を起こすようになった。

戦後に一時盛んになった猛烈社員と称されたものはこの類の人間であったろうが、そのようなものが長続きするはずがない。

私の政木フーチパターンによって人格の測定をすると、猛烈社員のほとんどが、左の方向に45度傾いた動物的精神の持ち主を示すパターンとなり、そのような人々は会社において部長職までは昇進するが、そこでストップしている。その反面、一流会社の社長、あるいは会長となっている人々は、フーチパターンは丸く、きれいな円形となり、人格の円満性をあらわしている。

フーチパターンによれば、女性の中にも左に45度傾いている動物的精神を持つ人がいるが、それらの人々は、男と同じく攻撃的な人間性を持ち、女性らしさ、やさしさを認めることはできない。肉体は女性の形をしていても、精神は粗野な男まさりの攻撃型の人間である。

攻撃型の人間は、自分さえよければよいという利己主義者が多く、他人の迷惑、苦しみ等を少しも考えずに行動をする者たちである。

このような人達が、会社または社会機構の主脳となると、自分のためだけを考えてあらゆる行動をするために、工場においては廃液のたれ流し、有毒ガスをエントツから噴出し、一酸化炭素をまき散らす機械を製造販売し、空気をどんどん汚していくものである。

このように、自分さえよければの部類の人達の心によって、意識しなくとも地球の空気を汚し、水を飲用不適にまで汚染してゆくことになる。

日本において、河川の水が全部飲用不適となれば、上水道の水はどこから求めればよいのだろうか。公害を平氣で造っている人々も、自分の飲む水をどこから手に入れようとするのだろうか。飲める水がなくなれば、日本人全体が数日間に死滅してしまう

こととなる。その時は自分も死ぬであろうことを今から自覚しておらねばならない。

人間の性格の本質は善である。全ての人間は善の心を基準として持っているが、悪を働く精神も常に共存している。そのどちらかが表面に多く出るかによって、その人の人間性が決まるものである。社会に尽くそうと努力しなくともよい、人のためになろうと背伸びをしなくともよい。毎日毎日の生活において、自分だけが悔いのない1日が送れれば、それで社会のためにも人のためにもなっているものである。

労使関係——労働組合の長が経営者に対して提出する苛酷な要求も、管理者が労働組合に対するきびしい応答も、すべて大衆の幸福の基礎の上に立っていなければならぬ。組合長が自己の売名のために、そして自己の欲望のための要求であってはならない。また経営者も自己の利益のみを温存するための搾取手段であってはならない。

有能な経営者および組合指導者は、共に組合員の幸福と職場の発展の両立を計り、ひいては社会を潤すものでなくてはならない。労使は決して対立するものではなく、経営者と組合は共に同じ目標を持ち、人々の幸福がいかに多く与えられるかについて努力すべきである。

例えば、子供の情操教育をあずかる先生方の組合と、文部省は本来対立すべき間がらではない。父と母のような気持ちで、きびしさとやさしさの教育を考えるべきである。

人間性は、子供のときに造られてしまうといわれているが、その大切な時期に、他人を追い越すための受験勉強のテクニックを教え、試験の点をとるためににはどんな手段も選ばぬような人間性にしてしまっては、その子供が大人になったときの社会はまっくらである。

現在の社会状勢も悪いが、人間の考え方がもっと悪いのではないか。

子供のときに、本来の真の姿の人間性を教えることは、後の社会をどれだけ明るいものにしてくれるだろう。児童生徒の子供心は、どのようにでも染まりやすいものである。ほんの1部の先生方が学校であらゆる事に反対するような行動をすれば、子供は自然にそれが自然の姿かのように思えてくる。その双葉のときの気持ちは、現今のような非行年齢の低下としてあらわれ、大人になっても持ち続けられるのではないだろうか？ 先生は、人間性のすべてが子供の手本であることを忘れてはならない。

小学・中学時代に刻み込まれたしつけは、大人になっても心の底に残っている。先生の植えつけた人間性は、永久に子供の気持ちに受けつがれてゆくものであることを考え、学問を教えると共に先生は最も人間性を大切にすべきである。

「ありのままの人間の心こそ眞の指導者のあるべき姿ではなかろうか」

先生は、特定の宗教とか思想にはまったく関係のない純白の心で子供に接するべきであろう。

類をもって集まる——あるグループ旅行の帰路の話である。岡山の山の中の道端で、果物を売っているおばさんの店があった。柿でも買うことになり車を止めた。6人が柿を買うと言うと、おばさんは1200円を1000円にしますと最初から値引きしてくれた。皆気持ちよく1000円づつ出して、市価の半額ぐらいの柿を買った。

そのとき同行の1人が、私が値切るから少し待ちなさいと言う。その人は50人ほどの人を使っている会社の社長である。私達は、いまさら値切らなくてもおばさんが

200円引いてくれたのだがなと思っていた。

「もっと安くせよ」と、しつように迫るがおばさんは、これ以上はダメですと、何回も断わっている。私達はさっさと1000円だけ払って車の中へ柿を運んでしまった。すると後からその社長は、5個ほど袋に入れたのを持ってきて、おばさんがまけてくれたよと言って差し出した。本人は買っていない。

その夜この社長の人間性を測定した。「あなたは包容力がない。自分の意思ばかり主張する人だから、社長ともなればもっと大きな丸い気持ちにならなければ、人はついてきませんよ」と言った。

「実は会社の経営が最悪の状態です。これは政府の方針が悪いためだ」と言う。その言葉をいま思い出した。

自分よりも弱い果物売りのおばさんに対し、値切る前にお客のことを思って安くしてくれたおばさんの心を考えず、更に値切る非情な心の持ち主には、ほんとうの親友はできないだろう。またよい得意先も去ってゆくだろうと思った。この社長の経営不振の原因是、弱い人の幸福を考えずに、自分の意思ばかり主張する利己主義者であるためではないだろうか?

この社長は、学生時代に火炎瓶革命家として班長となり、10年裁判にもなった人である。それを考えると革命の美名も、貧民のため労働者のためのものではなく、ただ自己の利益主張のためであったのかと、初めて本意を知るような気がした。

このような自分さえよければの革命家では、世の中は幸福にはならないだろう。また一時的に革命が成功しても、すぐ次の革命家に消されてしまうことだろう。

筆者も若いころは、強情で人の意見を全く聞かぬ人間であったが、他人に対しての慈愛の心はいつも持っていた。自分が犠牲になれば他の人に幸福がくると思えば、じっと我慢したこともある。それが奇跡の発生と共に、生命体は丸く大きくなり、「若い時は全く別人のような人間性となった」と友人達が言ってくれるようになった。

偏屈な人間性のときは、筆者の特許権をゴマかそうとか、だまそうと思う人が多く寄り集まり、いろんな問題が起きていた。そして何一つとして成功しなかった。

ところが奇跡の発生と共に、生命体が丸くなり人間性が変わってくると、おつき会いする人が全面的に変わってきた。大会社の会長、社長等、今までに思いも及ばなかった人々とじつ懇になった。それらの人々は誠心をもってのおつきあいとなり、毎日が感謝の連続となった。

いろはかるたにあるように、

「類をもって集まる」の言葉通り、自分が我利々々亡者であれば、近づく人も同類であろうから物ごとがうまくゆくはずがない。自分の心が円満で、人の喜びを考える人々の周囲には、人に幸福を与える人々が集まってくれるものだろう。自分の悲運をなげくよりも、自分自身の心の持ち方を一刻も早く変えることによって、よき友、よき幸せは自然に訪れてくることになる。

最近は非行少年の年齢がどんどん低下し、高校生から、中学生の校内暴力が多く報道されている。その中学生たちは、「私は悪いことはしていない。先生が悪いのだ」とインタビューに答えている。

小学生のころから、自分の意志の通りにやることは全部正しいものと思い込んでい

る子供がある。自分のやっていることが、他人に対してどんなに迷惑になっていても、それは自分には関係ないことである、と思っている。

小学生は、先生の感化を非常に受けやすく、中学生になって非行に走る原因是、小学生のときの先生の思想によるものが多い。

法律とか政令に従えとは言わない。法律も規則も人間の作ったものであれば、完全なものではないだろう。しかし、人間の本質から考えて、人間はこうでなくてはならないと誰でもわかっているはずである。本来の人間性に照らして、あたりまえのことだけをやってゆけばよい。それが自然の法則にのっとっていれば、大きな間違いはないはずである。

人はこの世の中で自分ひとりでは絶対に生きてゆけない。パン1つをとってみても、農家で材料を作り、電力を使って製粉し、それを上水道の供給と化学屋さんの力でイースト菌を醸酵させる。そして焼くときには、カマ造りの人達の努力で作ったカマの中で、発電所の電力を受け入れてようやく1つのパンができることになる。

この世の中は、どんなことでも、もちろんたれつで成り立っている。自分さえよければの気持ちでは、自分が生きて行けないことを知らねばならない。